

江戸川看護専門学校 2022年度 第3回一般入試 小論文

受験番号

氏名

問い

医療現場では、医療従事者側と患者側とのトラブルは少なくない。

朝日新聞社によると、2011年に東京都内の私立大学病院に勤務する医療従事者（約2万3千人）が回答した調査では、41.5%が患者やその家族らからの暴言を受けたことがあったと答えた。また、暴力を受けたと答えたのは14.8%だった（2022年1月30日『朝日新聞』朝刊、1面、東京本社）。

以下は、2022年1月27日、埼玉県ふじみ野市で起きた医師殺害事件に関する2つの記事である。

医療従事者の身を護るためには、どうすればよいだろうか。記事をよく読み、横書き400字以上600字以内で、将来医療従事者となるあなたの考えを論じなさい。

「自殺考え、医師も殺そうと」殺人容疑で送検、自傷痕はなし 埼玉の事件

埼玉県ふじみ野市の立てこもり事件で、県警は29日、人質の男性医師を銃で殺害したとして無職渡辺宏容疑者（66）を殺人容疑で送検した。渡辺容疑者は調べに「自殺を考え、自分1人ではなく先生やクリニックの人を殺そうと考えた」と話しているという。

死亡したのは医師の鈴木純一さん（44）。捜査関係者によると、司法解剖の結果、死因は胸に銃弾1発を浴びたことによる心破裂。至近距離から発射された銃弾は体を貫通し、即死状態だったとみられる。

渡辺容疑者は母親（92）と同居し、数年前から鈴木さんが院長を務める在宅クリニックを利用していた。母親は26日に亡くなり、鈴木さんが死亡確認をしたという。渡辺容疑者は27日夜、母親の在宅看護に関わっていた鈴木さんら医療関係者の男女7人を自宅に呼び出し、発砲。事前に散弾銃2丁や催涙スプレーを用意したとみられ、サバイバルナイフも見つかった。

東入間^{ひがしいるま}医師会などの説明では、渡辺容疑者からは母親の診療方針について、昨年1月から今月24日までに十数回の電話相談があったという。在宅介護を続けたいと望む渡辺容疑者に対し、鈴木さんはチューブで栄養を送る「胃ろう」（*1）などの選択肢を示した。胃ろうを続けた時は体への負担があり、入院が必要になる可能性も伝えていたという。

捜査関係者によると、立てこもっている最中の警察との電話を通じたやりとりでは「（医師らに）文句を言っようと思った」と話したという。

渡辺容疑者は「母親が死んでしまい、この先いいことがないと思った。自殺しようと考えた」と述べたが、自傷行為の痕は見つかっていないという。

『朝日新聞』2022年1月30日『朝日新聞』（朝刊、1面、東京本社）より引用。

*1「胃ろう」…がんや認知症などで、口からものを食べられない患者の腹部に穴を開け、カテーテルという管を挿して胃に直接栄養剤を入れる方法。長期にわたる栄養管理が容易で、患者の苦痛がやわらぐ、介護者の負担が少ない、などのメリットがある。一方で認知症末期患者の場合、かえって体に負担をかけ、人工的延命にもつながりかねないとの指摘がある。（『デジタル版イミダス 2018』〔集英社〕より）

「線香あげに来い」医師らに 蘇生断られ発砲 埼玉立てこもり

捜査関係者などによると、渡辺容疑者と同居していた母親（92）は他の医療機関に受け入れを断られ、数年前から鈴木さんが関わる在宅クリニックを利用していた。クリニックの職員らは、渡辺容疑者からたびたび罵声を浴びることがあったという。

これまでの県警の調べでは、母親は今月26日に亡くなり、鈴木さんが渡辺容疑者宅で死亡確認をした。司法解剖の結果、母親の死因は病死だった。

この日のうちに渡辺容疑者からクリニック側に連絡があり、渡辺容疑者は「線香をあげに来い」などと求めた。医療関係者の男女7人は、渡辺容疑者に指定された27日午後9時ごろに容疑者宅を訪れた。数人は名指しされていたという。

渡辺容疑者は1階の部屋に鈴木さんらを通し、「まだ生き返るかもしれない。心臓マッサージをしてほしい」と要求。室内の介護ベッドに安置した母親の蘇生措置を依頼したが、鈴木さんは対応を断ったという。その後、渡辺容疑者は散弾銃を少なくとも3発、発砲した。

『朝日新聞』2022年1月31日『朝日新聞』（朝刊、1面、東京本社）より抜粋。

以上

